

## ベルギー領コンゴの独立 ③

おやさと研究所教授  
森 洋明 Yomei Mori

コンゴ共和国では1970年代から90年代にかけて、隣国のコンゴ民主共和国の人たちを「ザイロワ (Zairois)」と呼んでいた。「ザイル人」を意味するフランス語だが、その発音にはなんとなく「見下した」ようなニュアンスが感じられた。アフリカの大国コンゴ民主共和国からは、多くの人がコンゴ共和国に来ており、首都ブラザヴィルだけでなく、国内の主要都市にも居住していた。通行許可証だけで往来できた時代には、滞在の有効期限が過ぎてもそのまま住み続ける不法移民も少なくなかった。

コンゴ民主共和国はベルギーから独立した当初は、フランス領だったコンゴと同じく「コンゴ共和国」という国名だった。その後「コンゴ民主共和国」と変更、1971年には「ザイル共和国 (République du Zaïre)」という名前になった。国名をザイルに変更したのは、軍の大佐だったジョゼフ＝デジレ・モブツ (Joseph-Désiré Mobutu) である。1965年、彼は軍事クーデターによって政権を掌握し、現地文化の復興の歩みを進めていった。国名の変更はその象徴的出来事である。ちなみにその1年前には、国の通貨も「ザイル」に変えている。この「ザイル」という表現は、現地語で「川」を意味する「Nzadi」、あるいは「すべての川を飲み込む川」を意味する「Nzadi o Nzere」を、最初にコンゴ王国と接触したポルトガル人が聞き違ってしまったものと言われている。ここから「ザイロワ」というフランス語も誕生した。



首都キンシャサにある  
パトリス・ルムンバの像

独立時 (1960年) には、カサブ大統領とルムンバ首相が協調体制にあったが、その後政治の方向性を巡って対立するようになり、その混乱のなかでルムンバは暗殺された。しかし、鉱山資源の豊富な東南部のカタンガ州の独立宣言など、国内の混乱は深刻になる一方だった。そのなかで軍の力を背景に台頭したのが、ルムンバ首相の配下にいたモブツだった。政権を取った彼は、それまでの憲法を一方的に破棄するだけ

でなく、野党を非合法化した。また、革命人民運動 (Mouvement populaire de la Révolution) という党を創設し、一党独裁で強い権限を持つ中央集権体制を確立していくのだった。さらにモブツは、国を独立に導いた英雄であるルムンバの国民的人気もうまく利用した。モブツ自身も首相の暗殺に関わっていたとされるが、国民的なヒーローを讃えることによって、彼の「後継者」としての地位を確立させ、国民からの支持を取り付けるようにした。

国名の変更と同時に、現地人に圧政を敷いたレオポルド3世の名前に因んだ「レオポルドヴィル (Léopoldville)」という首都の名前は「キンシャサ (Kinshasa)」に変更した。キコンゴ語で「塩の市」という意味のことばである。それはまた、独立以来「スタンレーヴィル (Stanleyville)」が「キサンガニ (Kisangani)」に、また「エリザベートヴィル (Élisabethville)」が「ルムンバシ (Lubumbashi)」というように、地方の有力都市が変更されてきた一種の「脱植民地化」の流れを汲むものでもあった。

植民地支配の名残を一掃するモブツの一連の改革は、自身の

名前も現地名を取り入れて「モブツ・セセ・セコ」と変更する徹底ぶりだった。さらに、それまで国のエリートが着用していたスーツにネクタイという西洋式の装いではなく、中国の人民服を思わせるような独自のデザインの服を着るようになった。さらには、アフリカにおける族長を象徴するかのような、杖やヒョウ柄の帽子を愛用するのだった。

その一方で、モブツは独裁体制をより強固なものにするため、アフリカにおける反共の「砦」という立場を最大限に利用した。実際に対岸のコンゴやアンゴラ、中央アフリカなど周辺の国々が共産化していくなかで、西側諸国はこの広大な国を自陣に留めておくためにさまざまな援助を行った。日本も例外ではなく、1971年にモブツは国賓として来日し、羽田空港で昭和天皇に出迎えられている。その後、通商産業省 (現経済産業省) の指導のもと、多くの民間会社の協力で鉱山開発会社が設立され、コンゴの南部において国家的な鉱山資源の開発プロジェクトが始められた。ピーク時には600人を超える日本人が施設の建設や開発のために駐在していたようだ。支援の一環で、1983年にはコンゴ川下流のマタディに円借款によって吊り橋が建設され、コンゴ川に架かる唯一の橋として今も重要な役割を果たしている。

独立国家の混乱だけでなく、東西冷戦という緊張した国際社会にあって、モブツはその後30年に及んで政権の座に就いてくのだった。90年代に入り、アフリカの民主化が叫ばれると、彼の独裁政治にも終止符が打たれ、政権を追われた彼は亡命先のモロッコで1997年9月に亡くなった。彼が蓄えた私的資産と国が抱える借款がほぼ同じ額だったとさえ言われている。

その後、ザイルはコンゴ民主共和国へ名前を戻した。複数政党制が導入され、民主選挙によって大統領が選ばれるようになった。しかし、選挙の不正や反政府分子との武力衝突、さらには大統領の暗殺など、今日においても混乱が続いており、世界で最も危険な地域であるとも言われている。ベルギー領コンゴでは国名が変更されるたびに多くの血が流されている、まさに「平和以外は何でもある国」(米田正子『世界最悪の紛争「コンゴ」』創成社、2010年) となっている。そして、そのような国を作らせたのが、何の準備もないまま唐突に独立させた旧宗主国であり、資源開発の権益を守るため、あるいは反共の砦を保持するため独裁政権を支え続けた西洋諸国であり、さらに90年代に民主化を急速に促した国際世論であると言えるだろう。

昨今、国名の変更とともに「ザイロワ」という表現がブラザヴィルの街で聞かれなくなってきた。国名に「コンゴ」がついている以上、民主共和国の人たちも「コンゴレ (Congolais)」になってしまったからだ。これでは対岸の「彼ら」と「区別」ができない。そこで最近では、国名の略語である「RDC」や「キンシャサ人」を意味する「キノワ (Kinois)」というフランス語がよく使われるようになってきている。



モブツ大統領  
(1965～1997)